

ありがとう

グラシアス！ 箕輪町の皆さん

S Oペルーチームとの交流に通訳同行して

清水 武

第1日(2月23日)

片道40時間への挑戦

熱い心は伝染していく

真夏の南半球から真冬の北半球へ。しかも、寒いからこそスペシャルオリンピックス冬季世界大会が可能な寒い長野県。箕輪町にはペルーから17人がやってきた。監督やコーチを除き、選手のすべては地方の各県から集っている混成チーム。21歳だという男子のアスリートは言っていた。

「来日にあたり、まず首都リマに出るためのバスによるアンデス越えが20時間、そこから飛行機で約20時間余。計40時間です。ほぼ地球半周の旅でした」

日本との時差14時間。役場前に到着した午後2時は、現地では深夜の0時にあたる。そこから歓迎と交流の行事が始まった。長旅の疲れも眠さも、若さと精神力で乗り越えるのだろう。「自分たちもトーチランに加わりたい」と、寒風のなか、八十二銀行の前まで繰り出した。

ユニフォームの上には厚いコートを着た。歓迎委員会のとっさの手配だった。筆者も彼らの後を走る。短い距離だがあの坂は、若い彼らよりも高齢の身には少々きつい。

役場前の広場では、箕輪中学のブラスバンド部がペルー国歌も演奏してくれた。時に突風が吹き荒れた寒風のなかでの長時間の待機と演奏。母国をはるか離れた地で、自分の国の歌を聞く彼らの胸には、熱いものが込み上げていたようだった。

熱い心は、夜の歓迎交歓会で、日本で同じ境遇にある障害者や受け入れ役員、関係者にも伝染していった。宿泊のながた荘。畳の間で和太鼓演奏や玄関で餅つき体験の後、食堂で立食の会食会となった。寿司などの“日本の味”のほか、和牛ステーキなど“外国人向けの味”も用意されていた。



日本式流儀にも取り組んでみる

やがて、小さな舞台で日本側の有志が音楽演奏を始めた。「コンドルは飛んでいく」などのアンデスの曲も流れ出した。と、ケーナが得意というジョニー君が舞台上に上がり、贈呈されたばかりの竹笛と一緒に演奏に加わった。続くように他の選手も楽器演奏に飛び入り参加。フロアーでは曲にあわせてダンスも始まった。踊りの輪は次第に大きくなり、いっぱい広がっていく。

共同作業の家の人々も皆と手をつなぐ。肩を組み、足を鳴らし、踊りの輪はいつまでも続くように思われた。ギター奏者の顔には汗が吹き出ている。

「もっともっと、ペルーの仲間たちと踊りたい」。そんな日本の障害を持つ人々の顔にも汗が光る。瞳はキラキラと輝いている。こんなに嬉しそうに希望に満ちた障害者の表情を、私はこれまでに見たことがない。素晴らしいホットな交歓の一夜だった。

第2日(2月24日)

ハードな練習とホットな交流

東小 ペルー国歌をスペイン語で

2日目は午前9時から松島保育園を訪問した。子供たちの瞳はどここの国でも澄んで輝いている。ペルーのアスリートたちの表情もなごやかにゆるんでいく。トンネルくぐりの鬼ごっこでは、童心に帰って幼児たちと手をつないだ。

SOの大会に向け、体調も技術も整えなければならない。その後、町民体育館ではハードな練習が繰り返された。準備運動に腕立て伏せを20回以上、少しの手抜きも許されない。足を交互に交差するジグザグ疾走、短距離を全力で走り笛の合図でストップ、出来るだけ早く逆方向に全力で走る。もたもたしているとコーチから叱声が飛ぶ。どんなに苦しくても、一人で生き抜いていける力を付けさせようとの教育的配慮もあるのだろう。選手もしがみついていくように必死である。障害は知的面で、体はしっかりしているとはいえ、筆者にはかなりきつい練習のように見えた。

午後からは東小学校で児童たちとの交歓となった。

児童会長あいさつ、和太鼓の演奏、日本の遊び(けんだま、こま回し)の紹介、ペルー選手によるフロアーホッケー紹介と東小の子供たちとの交歓試合、校歌ダンス、花束・千羽鶴・習字の贈呈等々、多彩な歓迎プログラムの中で彼らを特に感動させたのは、東小の生徒によるペルー国歌の斉唱だった。メロディもよく合っていたが、なんと歌詞をスペイン語で歌ったのである。

ペルーの代表は、挨拶の途中で涙声になり詰まってしまった。日本語に訳したチーム同行の通訳も、その部分に来ると涙で続かなくなってしまった。スペイン語のわかる自分も、胸にグッと来るものがあった。リマで体育の先生をしているという副団長(団長は打ち合わせで長野市へ向かっていた)は、真心の歓迎に心からの感謝を述べた後、国歌についての感想を語り始めた。

「まさか日本に来て、小学生の皆さんから母国の国歌を歌ってもらえるとは予想だにしませんでした。それもスペイン語で。しかもペルーの小学生より上手なスペイン語で！」

こう言いかけて、感極まったのか絶句してしまったのである。他のペルー選手たちも感動で顔を赤らめていた。その姿に、前にいた小学生たちも深く胸を打たれているようだった。

聞けば、学校ではペルーの選手団が来ると知って、少しでも喜んでもらおうと、在京のペルー大使館から国歌の楽譜等を取り寄せ、音楽の先生を中心に練習を重ねてきた、という。

真心は、陰の努力は、必ず人の胸に届くものだ。「心こそ大切なれ」である。

余談ながら、筆者もちょうど半世紀前に東箕輪小学校を卒業した。小学校 6 年の時の学芸会の際、劇「ドン・キホーテ」で、サンチョ・パンサ役をしたことがきっかけとなり、その物語に惹かれ、結果的にスペイン語を勉強することになった。多感な少年期により刺激と出会うことは、将来の人生を大きく開くきっかけとなることもある。ペルー選手団との交歓が、また児童たちの啓発の一契機になれば、なんて期待も寄せた訪問となった。

第 3 日 (2 月 25 日)

同じ地球の人間だもの

お互いに刺激、啓発し合う

箕輪滞在の最終日。午前 9 時に町の「共同作業の家」を訪問した。ペルー、日本側のそれぞれが自己紹介した後プレゼントを交換。お互いに同じような状況にあることから、どのような仕事をしてるのか、どんな作品を作っているのか、スポーツはするのか、特技は何か、といったような質問も飛び交った。

続いて、手を取り合い、肩を組み合い、歌をうたい、ダンスを一緒に。狭い室内でぶつかり合いそうになりながらも、和気あいあいと。

ぼくらはみんな生きている 生きているから歌うんだ
ぼくらはみんな生きている 生きているから悲しいんだ
手のひらを太陽に透かしてみれば まっかに流れるぼくの血しお
みみずだって おけらだって あめんぼだって
みんなみんな生きているんだ 友だちなんだ

そう、みんな、みんな友だちなんだ、アミーゴなんだ。日本語を話していようが、スペイン語を話していようが、身体に障害があろうが、知的な障害があろうが、膚の色が違おうが、ペルーの国に住んでいようが、日本の国に住んでいようが、みんな、みんな同じ地球の人間なんだ。



箕輪町町長ほか関係のスタッフと

い発見をした。ペルーでは日本に比べれば、電気製品等は種類も少なく値段も高い。「デジカメを見てみたい」「ラジカセを持って帰りたい」「子供に靴を買ってあげたい」といった要望にあわせて、店内を歩く。

こんな気持ちを伝え合うのが、また広めていくのが今回のスペシャルオリンピックスの一つの意義にちがいない。このレポートもその一助となれば、東京からボランティアで駆けつけた筆者の来がいも出てきて嬉しいかぎりなのだが……。

ところで、空いた時間のショッピングお手伝いをしながら、自分としても面白

ラジカセの陳列棚前で品を手にとって見る。値段も安く手ごろである。選手に「どこの国の製品ですか？」と聞かれ生産国を見る。と、「made in China」。子供靴の並べてある中から、気に入ったという一足を取って見ると、「made in Korea」。 「made in Japan は無いんですか？」と聞かれ、「今は、中国製でも韓国製でも性能・品質に余り変わりはありませんよ。値段は安いし。今どきは日本製はあっても値段がグーンと高いからね」と私。すると「せっかく日本に来て、ほかの国のものを買って帰っても意味が無いでしょう！？」と。なるほど、一理はある。それほどに、大量生産の商品は外国製に頼っている日本の現状に、私自身あらためて驚いた次第だった。

受け入れ準備で関係の方々のご苦労されたと思う。その陰の苦労があって交流は大成功した。そして、私は思う。ペルーの皆さんも喜んでいたが、実は受け入れに当たった箕輪町こそが、目に見えない、いろんな宝物を得たのではないかと　。